ボランティアが集結「笠松みなと公園清掃活動」

毎年、8月15日に実施されている恒例の「笠松川まつり」ですが、今年は小雨の中での実施となりました。雨のため中止になったイベントもありましたが、「万灯流し」や「花火」は行うことができました。あいにくの天候にもかかわらず、花火の打ち上げが始まる午後7時30分頃になると、会場の「笠松みなと公園」は、とても多くの人で埋まりました。屋台が連なる堤防道路は、まっすぐに歩くことができないほどの人混みとなりました。

さて、こうしたイベント会場にゴミはつきものですが、さすがに「道徳のまち笠松」の面目躍如、ゴミは会場各所に設置されたゴミ収集ボックスに捨てられ、ポイ捨てゴミや放置ゴミは、かなり少ないと感じました。

一夜明けて、8月16日には、「笠松みなと公園」の清掃活動が行われました。早朝6時からのスタートでしたが、それよりも前から活動している方が何人もあり、定刻には、小学生を含む100人以上のボランティアが集まりました。前日からの小雨が続く中、各々がゴミ袋を片手にみなと公園一帯に広がり、ゴミを拾い集めました。20分程度の短い時間でしたが、イベント前のきれいな状態に戻すことができました。

ボランティアの心で、自ら進んで行動する参加者の姿は、とても輝いていました。

かさまつの民話「昔むかし」

どんぐりがゆ⑤

「お天気のせいじゃ。雨が降ってひえる。それがもとじゃ。」と久平は子どもや妻を悟した。妻や子どもは、やせる一方であった。かゆの中のわずかな玄米をすくい、口にもってはいくが、すぐはき出してしまうのであった。

久平も同じであった。

弥平、留、妻のよわよわしい息づかいを聞きながら久平は、必死になって腹痛をこらえていた。たたみに爪をたて身をよじるようにしながら痛みと戦う久平の頭に、庄屋さまにこの病気のことを話そうというひらめきが走った。

久平は、全身の力をふりしぼって立ちあがると、残りの米一升をもって、よろよろと戸口へ向かった。

外はやはり、黒い雨が土をうっていた。しばらく戸口にもたれながら腹の痛みをこらえていた久平は、一升の米袋をしっかりとだきかかえながら雨のなかを走りだした。「このお米さまで医者さまをよんでもらおう。あと十日もすりゃあ新米ができる。それまでは樫の実で。この一升のお米さまで妻や子の命を。」久平は、よたよたと歩き続けた。

しかし、川の土手へさしかかったとき、掘り返された草の根につまずいて久平はつんのめるように倒れた。

茶色の米がどす黒い土の上に白く光って散った。

久平の手がにぶく動いて米をつかもうとしたが、そのまま雨にうたれてとまった。

雨が一段と強く久平の背中をうった。

（おわり）

かさまつの民話「昔むかし」は昭和54年に発行されました。
笠松中央公民館・松枝公民館・総合会館でご覧いただけます。